

◆全ては自己申告だった

私がこの世界に足を踏み入れた 1970 年代から 80 年代の書物に掲載の血統表には、いまでは奇異なものがありました。

例えば、前頁の図 4 は、『日本の種牡馬録 1982 年版』（サラブレッド血統センター）に掲載されている当時中堅の活躍馬を数多く輩出した種牡馬ネプテューヌスの 5 代血統表ですが、母の父の箇所をご覧ください。これは、2 代母 Barberybush に Tornado を交配するも受胎しなく、改めて Victrix を交配し受胎して生まれてきたのが母 Bastia であるものの、Bastia は Tornado の仔であることも完全に否定できなかったことを意味するのでしょうか。

また、凱旋門賞を勝ち種牡馬として日本に輸入されたラインゴールドの母 Athene の父 Supreme Court の父は「Persian Gulf or Precipitation」、1960 年代の日本の代表種牡馬ソロナウエーの 2 代母 The Widow Murphy の父は「Hainault or Pomme-de-Terre」など、探し出せば次々と出てきますが、各々の前者である Tornado、Persian Gulf そして Hainault は、今日のこれら各馬の血統表では一切記載されていません。

18 世紀、19 世紀のみならず、20 世紀半ばの血統記録においてもこのような疑義があることを認識すべきです。DNA 鑑定などという科学的手法が確立したのはごくごく最近の話であり、ひと昔前まではどの種牡馬を交配したかなど、全ては自己申告だったわけです。

以上のような事実を見ると、20 世紀初頭に英国で施行された、祖先の全てが『ジェネラルスタッドブック』に収録されている馬に遡れなければサラブレッドに非ずとした「ジャージー規則」なるものがいかに理に適わないものであったかが分かりますし、日本において「サラ系」が差別を受けたことなどまさしく的外れです。

(図 5) 『JBBA NEWS』2015 年 11 月号 (vol. 514) に掲載された 2015 年英国チヴァリーパークステークスの優勝馬 Lumiere の情報

<b>ルミエール</b>		<b>牝 芦 2013.3.10生</b>	
<b>[Ow.]</b> Sheikh Hamdan bin Mohammed Al Maktoum		<b>[Br.]</b> Darley	
<b>[累計成績]</b> 3=2-1-0		<b>[主な成績]</b> ローザー S G2-6f 2着,	
Giant's Causeway(USA) 1997	Storm Cat – Storm Bird		
Shamardal(USA) 鹿 2002	Mariah's Storm – Rahy		
Helsinki(GB) 1993	Machiavellian – Mr. Prospector		
	Helen Street – Troy		
<b>Lumiere (GB)</b>			
Tobougg(IRE) 1998	Barathea – Sadler's Wells		
Screen Star(IRE) 栗 2005	Lacovia – Majestic Light		
Actoris(USA) 1994	Diesis – Sharpen Up		
	Avice Caro – Caro		
主なクロス : Northern Dancer 5×5 Secretariat 5×5 Raise a Native 5×6・6 [F1-s]			

加えて、「テンプラ」と呼ばれるアングロアラブの血統偽装があったことは公然の事実でもあるように、本場英国においても、当時のサラブレッドの血統書が全て正しいなんていうことはどう考えてもありえないのです。

さらに、前頁の図5は日本軽種馬協会が発行する機関誌『JBBA NEWS』2015年11月号 (vol. 514) からの引用です。2015年の英国チヴァリーパークステークスの勝馬である Lumiere (本書のファミリーラインの頁は1-s-2) の情報ですが、何かおかしいことに気づきませんか？

遺伝の法則上、芦毛馬は両親のいずれかが芦毛であることが絶対条件ですが、芦毛の Lumiere の両親とも非芦毛となっています。もしもこれが事実なら、突然変異で白毛が生まれた時のように一大ニュースになるべき話です。最初私は Lumiere が芦毛という情報が間違いかと思いきや、このレースの動画を見てみると、確かにこの馬は綺麗な芦毛でした。父親の Shamardal は鹿毛であることは確かなので、種牡馬取り違えがない限り、母親の Screen Star は必然的に芦毛ということになります。

しかし、『JBBA NEWS』のみならず、日本軽種馬協会が運営の私自身最も利用させて頂いている血統情報サイト『JBIS-Search』をはじめ、ほとんどの海外の血統情報サイトにおいても、母親の Screen Star の毛色は申し合わせたように全て「栗毛」となっていたのです。正しく「芦毛」となっていたのはジェイエス発行の『フューチュリティ』ぐらいでした。

つまり、これらサイトは全て同じ情報源に基づいていることが容易に想像でき、情報の発信元が、それが故意であれ過失であれ誤った情報を流したならば、ひと昔前のみならず現代においてもそれが何の疑いもなく事実として扱われてしまうことを意味します。

これは、サラブレッドの血統の世界のみならず世の中の全ての分野において、情報化社会となった 21 世紀においては特にその危険性をはらんでいるということではないでしょうか？昔だろうが今だろうが、いとも簡単に情報操作はされうることです。

参考まで、『競走馬ファミリーテーブル』でも、両親とも非芦毛なのに芦毛と記載されている馬がいくつか見つかります。例えば、2015年のオーストラリアのGIレース The Galaxy の勝馬 Sweet Idea の7代母 Brigg Fair (1943年生) は芦毛となっはいますが、その父 Pink Coat は栗毛、その母 Stourbridge Fair は鹿毛です。よって、本書のファミリーラインの樹形図(頁は2-d-2)では、いくつかのデータベースの情報をもとに Brigg Fair の毛色は栗毛と記載しました。

1821年、『ジェネラルスタッドブック』の第2巻で「サラブレッド(=完全なる血筋)」という言葉が初めて使われましたが、このようなありさまから到底そのような言葉は適切ではなく、「サラブレッド」と命名した人は、完全なる血筋の馬だと関係者を洗脳したかったのでしょうか。

### ◆完全なものなど存在しない!

改めて言えることは、誤りのない完全な記録などないということです。樹形図を加筆する際にいくつかのデータベースサイトを利用していますが、どのサイトにおいてもデータの間違ひが見つかります。人がやることですから当然です。言い訳になりますが私もしばしば間違えますし、もしも誤りが見つければ相互に指摘し合い、今後のためにも改善していく必要があるのではないのでしょうか？

しかし、前版でも指摘した Screen Star の毛色ですが、この第2版の原稿を書いている時点でほとんどのサイトにおいても残念ながら訂正されておりません。これは、一度記録されたものはそう簡単には訂正されないということを物語っており、このようなことが残念ながら300年以上続いてきたわけです。

昨年10月のブラジルのGIレース Linneo de Paula Machado の勝馬 El Shaklan の母 Odisseia Espacial (2005年生、本書のファミリーラインの頁は16-g-2)、さらには今年2月のブラジルのGIレース Estado do Rio de Janeiro の勝馬 Guaruman の母 Ukulele (2005年生、頁は7-4)などは最近の馬であるにもかかわらず、私が利用しているどのサイトにおいても毛色の記録がありません(現地の正式な血統書には記録されているものとは思いますが)。

また、各馬の毛色のデータにしても、或るサイトでは brown (黒鹿毛、青鹿毛) であるのに、